

ITによる「現代的な学びの社会空間」を形成する試み

江戸川大学 社会学部 天野 徹 (mail@amanolab.org)

・「学び合いの共同体」形成の難しさ

(1)ある学生の発表から...

若者の学力低下が叫ばれて久しい。先輩後輩の間はもとより、同年代の学生達の間でさえ、学び合いの状況が、なかなか実現しない。これは私にとって、長年の疑問だったのだが、若者論をテーマに研究している私のゼミの学生の発表から、一つの構造が見えてきたような気がしている。それは、次のような対照的な類型の存在である。

同年代・同質的なクラスターの形成(水平的・同質的)...心地良い、まったりとした関係 マニュアル依存、キレる世代...「消費・遊び」を媒介としたつながり ? (ケータイ・メールのイメージ) 「自分の居場所」と認識	V.S.	就職後の職場での人間関係(垂直的・異質的)...誤解・いきちがいなどの克服が必要 文化・経験の伝承、知的創発...「生産・仕事」を媒介としたつながり ? (e-mail や www のイメージ) 「自分の居場所ではない」と認識
--	------	---

すなわち、異質な存在、および、垂直的な関係にある存在との間でのコミュニケーションを通じた意味の伝達や発見、創造という機会が、構造的に失われ、その結果として、学生達の間で水平的・垂直的分断が生じ、細かなクラスターが形成されているということだ。

(2)『オレ様化する子どもたち』...共同体の崩壊と競争・市場感覚の浸透...

こうした学生達は、いわば消費社会の落とし子というべき存在であり、「共同体感覚の喪失」と、「自分探しの常態化」を特色としているものと思われる。

「共同体感覚」の喪失...「インタラクティブなやりとりを病的に忌避」	「自分の情報がバレると、仲間内での地位が低下するじゃないか!!」
「自分探し」の常態化...「私語や居眠りを注意する...と逆ギレ」	「オレなりのやり方で参加してやっ ているんだから、怒るなよ!!」

与えられた知識の丸暗記を拒否して、実感的に理解することを大事にする気持ちは分からないでもないが、それはそもそも先輩後輩の間での、あるいは仲間内での学び合いや、自発的な読書・自主学習を通して身に付くものである。しかしながら、仲間内で自分の実力が知れることを恐れ、講義へも「オレ流」で参加。家庭学習もしないというのでは、知の習得自体を拒否しているに等しい。

こうした実態さえも、「自分の居場所」「自分探し」という言葉で正当化され、講義にインタラクティブ性を持たせようとしたり、私語を注意したりすると、「オレたちを馬鹿にする」教師、「セクハラ」教師というレッテルが貼られてしまう。大学全入時代を控え、大学は学生の言い分を受け入れざるを得ない。ここに、現状を正しく把握した上で、講義の方法論そのものをデザインし直さなければならない理由がある。

(3)戦後社会の変遷と子どもたち

さて、諏訪哲二(2005)は、子ども達が育つ社会の特性の変化を、次のような形で捉えている。

「農業社会的」な子どもたち...共同社会的な精神風土と人間関係が強い
「産業社会的」な子どもたち...共同体的なものからほぼ離脱

「消費社会的」な子どもたち... 共同体的なものがほぼ消滅

現在の日本は消費社会の段階にあるが、同氏によれば、この段階においては、おとなも子どもも教師も生徒も自分の判断、自分の価値判断は「客観的で正しい」、「他のみんなにも通用する客観値だ」と確信するようになる、という。つまり、現在、学校の教室で起こっていることの背景には、こうした社会背景があるということである。

いまどきの授業風景

(1) 授業空間の本質的变化

このように考えれば、現在の授業では、教師の考えている授業空間と、子ども(生徒)の個々が「参加」している授業空間が、別のものになっているといわざるをえない。すなわち、私語をしていようが寝ていようが飲食をしていようが、生徒自身はそれぞれ自分のやり方で、授業に「参加」し、指導に「従い」、教師に「協力」していると思っているのであり、彼らは「彼らの考える当然」としての授業参加のありようを全うしようとしているだけなのである。

従って、生徒たちが独自につくりあげている一人ひとりの「授業空間」の心象(内面)に立ち入らない限りは、授業は安泰であるが、私語を注意しようものなら、「オレの内面(授業参加)に対する教師の勝手な介入」「オレの人格の全面否定」と受け取られ、彼らの内面を傷つけたとして、トラブルが発生することになる。(『私語を注意出来ない授業』)

(2) 「希望格差社会」の子どもたち

近年、家庭学習の時間が極端に短い、あるいは全くないという子ども達が増えているという。また、家庭の崩壊、地域社会の崩壊という言葉に見られるように、身近な大人達に温かく見守られながら育つ子ども、お手伝いや真剣な議論などを通じた社会化を持つ子供が減少してきている。さらに、都市化によるセグリゲーションの進行(特に郊外化)や一人遊びの増加は、子ども達の社会経験の低下を招いているのではないかとと思われる。

子ども達が育つプロセスにおけるこのような変化は、他者および社会への関心の低下や、コミュニケーション能力の未発達をもたらし、知的活動の基礎となるような社会的な知識や経験の不足だけでなく、そうしたものに対する必要性すら感じない子どもを創り出しているのではないか。基礎的な知識が無ければ知的なイメージネーションは成立しないので、子ども達が形成できる人間関係は、自立した個の実質的なコミュニケーションに基づくつながりではなく、未成熟で同質的な個の、相互依存的で小規模なクラスターとなる。

彼らの間では、クラスター内およびクラスター間の双方において、従来の意味における「学びの共同体」の成立を期待することは難しく、従って「生徒が40人いれば40通りのカリキュラムが必要」(旧文部省)ということになるが、これは勿論、実現不可能である。

(3) 時代の雰囲気としての「交換」と、教育の本質としての「贈与」と

但し、現代の子ども達は、情報メディアとお金の発するメッセージによって、社会的に自立(一人前のおとな、生活者になる)するまえに、すでに「個」を「消費主体」として自立させていることは否定できない。これは、学校のルールや決まりなどといった「共同体的なもの」についてさえも、まず「従うべき」という姿勢が消滅し、すべてにおいて、子どもである「この私」が、受け入れるか受け入れないかを判断するようになったことを意味している。子どもたちは、教師と生徒は「平等」、講義も注意も「等価交換」的に行われなければならない、と考えるようになった。消費的社会環境の下、共同体的な関係性のもとでの、教員から生徒

への「贈与」行為としての「教育」が、市民社会的な関係性の下での「商品交換」行為へと、本質的に変化したのである。

・講義の多チャンネル化・多メディア化の必要性

学生たちの多くは、同じ教室にしながら、それぞれの関心を持って、友人との競争関係を前提としながら、教員との間に水平な市場交換の論理を適用しつつ、受講している。教育が贈与から交換へと変革しなければならないとしたら、講義もまた、経済学分野の「一般均衡理論」に似た発想で、再構築されなければならないだろう。但し、教育が単なる知識の伝達という機械的な行為ではなく、文化の伝達というヒューマンな行為であるならば、それを、単なる「知識の切り売り」にしてしまうのではなく、「理解する喜び」を伝える行為にする努力を行うべきである。

例えば、一つの教科の一つのテーマについても、様々な切り口から多様な意味をもたせて解説を行うことによって、個々の学生の関心を何らかの意味で満たすような工夫を行うこと。あるいは、学生たちの知識と経験の不足を、彼らの内面を傷つけずに、しかも、リアリティをもたせて判りやすく伝達し、彼らが「入り込み易く」することが必要であろう。

そして今ひとつ重要なことは、時空間を共有していても、講義を単純な学びの共同体と想定するのではなく、今日的な特性を持った多様な学生達が、多様な関心と参加の方法論を持って織りなす「まだら模様の」共同体であることを認識し、学生達との個別なコミュニケーションと全体的なコミュニケーションを相補的・双方向的に、必要な場合にはきめ細かく行っていくことである。

そして、マルチメディア性とインタラクティブ性、専門性と学際性、および、全体コミュニケーションと個別コミュニケーションの使い分けと融合を行っていく上で、ITは有力な手段となる。

・プロトタイプとしての三つの講義について

次に、天野(発表者)がこうした考え方に基いて行っている、三つの講義(社会統計学、都市社会学、地域情報論)について、三講義に共通のアプローチと異なるアプローチに分けて整理し、紹介することにする。

[共通のアプローチ]

Keynote(プレゼンテーションソフト)の活用とキャプチャデータの柔軟な活用
パターン化されないクエションの設定と、メールでの回答
講義中に受信状況をモニタリングし、リアルタイムで回答内容を紹介
講義内容、試験内容、講義中の話題など、学生の感想・質問については、必要を感じた場合には、時間を置かず直ぐにメールで返答
気に触る感想こそ、学生たちとコミュニケーションをとる最良の機会
...教室内のオープンコミュニケーションにより、集合的合意形成をはかるべき...

[異なるアプローチ]

統計学では、数式や手法だけを解説しても、関心を持ってもらえない
一つ一つの理論について、現実社会との関わりや、歴史的エピソードなどを交えて丁寧な解説することで、文系的な理解と理系的な理解の融合を目指す

都市社会学では、難解な社会的な概念を紹介しても、実感的理解を得られない
一つのテーマについて、今日的な話題、歴史的な話題についてのキャプチャ・
データを活用することで、人生設計に役立つような実感的理解を目指す
地域情報論では、技術発展と社会構造の変化との関連や日常生活との関連についての
イマジネーションが不足
技術系、社会系、経済系、日常生活関連など、様々なキャプチャ・データを活用
することで、情報化のもたらす影響についての総合的な理解を目指す

このような方法論の採用により、学生の講義への参加度、および、満足度は、前年度に比べて大いに向上しているように思われる。

但し、こういった方法は、板書・プレゼンソフト・キャプチャデータの使用の適切さについての考慮や、インタラクティブ性を成立させることへの配慮を、きめ細かく行わなければ、逆効果になることも事実である。

板書： ノートを取る過程で、学生たちが、目・耳(受動)、手(能動)の三つで行動する。
一度に提示できる情報の量は限定され、受け手側に予習・復習が必要
プレゼンソフト： 情報を判りやすく整理し、視覚的な効果を工夫して示すことにより、学生たちの知覚を刺激し、強い印象を与えることができる。
教師の側も、生徒の側にも、相当な力量が要求される。
キャプチャ・データ： 教科内容を理解するために必要と思われるものを、学生たちに実感をもって「疑似体験」させることができる。(バーチャル体験!?)
構成や編集、時代性や身近度など、様々なポイントから教材を厳選する必要
始めから「教育」を目的として編集された教材は、逆効果になる可能性有り

講義の構成においては、これら三つの方法と、先に述べたインタラクティブ性を実現する方法を上手く組み合わせていくことが必要である。この点については、教科の性格と大学・学部・専攻と年度毎の学生の質および教員の個性に応じて、現場の教員が創意工夫して行くのが適当ではないかと思われる。

.おわりに

学生達の多くは、自分とは異質な他者とのコミュニケーションを成立させる術をもたないまま、大学という環境に入ってくる。そこで彼らは、自分なりのルールで人間関係を築こうとするが果たせず、自我の未成熟を顧みずに「商品交換の論理」で講義に臨んで挫折し、その結果として、学生生活に対して不適応を生じる可能性がある。

こうした問題を解決するための最良の方法は、学生の生活指導のマニュアルを整備することではなく、大学の講義の方法を、二つの方向で変えていくことではなかろうか。その一つは、講義内容を追体験させ、様々なメディアを使いこなしながら、常に新しい刺激を与えて、彼らに学問の内容を伝える方向性であり、今ひとつは、学びの共同体形成の限界を認識し、様々なレベルのコミュニケーションを使い分けながら、彼らを市民社会を生き抜く上で必要な「個の自立」へと誘(いざな)うという方向性である。

多くの学生が参加する講義の時間を、多様な学生が多様性を持ったままで参加できるような時空間となす私の試みは、目を見張るといふまでにはいかないが、一定の効果を上げつつある。教育での IT 利用は、システムやコンテンツの整備に力を入れる段階から、個々の教師のセンスと行動力によつて多様な問題に対処できるか否かが、問われる段階に入っている。